

インド細密画の初期

Early Indian Miniature Painting

インドでは仏教は6世紀に入るとヒンドゥ教化(密教化)して弱体化し、さらにイスラム教の侵攻により13世紀初めには壊滅しますが、それ以前の11、12世紀の仏教経典挿絵が若干残されています。15、16世紀にはジャイナ教経典挿絵が多く描かれました。同じころヒンドゥ教経典挿絵や、ムガル以前のイスラム太守国で物語絵がわずかに描かれました。

《笛を吹くクリシュナ》(部分) —パラム派— 1520-40年頃



インド細密画は、
観る人との対話である。

ラージプト絵画

—平地派の絵画

Rajput Painting-Rajasthani Painting

ラジャスタン地方の藩主国と中央インドの一部のラージプトの藩主国の宮廷で描かれました。最初期は平面的な独自の絵画でしたが、17世紀後期にムガールの画工房が解体されると画家達がラジャスタンの諸藩主国に招かれ、ムガルと各藩主国の絵とが混ざり合い、17世紀末期から19世紀前期までそれぞれの藩主国で特色のある魅力的な絵が描かれました。



《ヒマラヤの薬草山を持ち帰る
猿王ハヌマン》(部分)
—マンコットまたはバソリ派— 1710-20年

悠久のロマン、

華麗なるインド細密画の世界へ。

ムガル系絵画

Mughal Painting

ムガル帝国の最盛期である16世紀後半～17世紀末までに優れたムガル宮廷絵画が描かれました。またデカンのイスラムの太守国でも、ムガルと一線を画しますが、ムガル絵画に類する絵が描かれました。ムガル宮廷の力が衰えてからは、地方のイスラム太守国やヒンドゥのラージプトの宮廷でも、一部ムガル色の強い絵が描かれました。

《ポーズをする女》(部分)
—地方ムガルアワッド派— 1780年頃



「インド細密画」とは宮廷絵画であり、16世紀後期から19世紀前期にかけてムガル帝国の宮廷やインド中部から西北部の武人階級であるラージプトの藩主国の画工房で描かれた絵画です。インドには、「一枚の絵と観る人は一対一で向き合って対話するもの」という絵画観があります。それゆえ小さな画面に絵が描かれました。しかしインド細密画は小さな画面に細密に描かれるだけではなく、画面を通して豊かな世界が広がっています。描かれた美しさだけでなく、その奥にある内容や意味、心を読むといった絵を鑑賞する術は、音楽や詩歌と同じく王侯貴族の教養とされ、宮廷人の嫁入りにも持参される重要なものでした。

本展では、日本画家・インド美術研究者である畠中光享氏が約半世紀の歳月をかけて調査研究のために収集した「畠中コレクション」のインド細密画をご紹介します。「畠中コレクション」はインド細密画の全ての流派を網羅した、国内では唯一最大のコレクションです。インド細密画の、小さな画面に広がる深く豊饒な世界をお楽しみください。

ラージプト絵画 —山地派の絵画

Rajput Painting -Pahari Painting

パハリとは山地または丘陵地帯を指し、標高400mから2000mを越える国もありますが、多くは1000mを越える位置にあり小国が多いです。パハリの絵画は大きく二つに分けられます。18世紀前半まではバソリスタイルと言われ、原色を強烈に使い、目は蓮の花弁のように大きく、豊かな表情を持って描かれました。18世紀後期以降はカングラスタイルと呼ばれ、山の霧がかかったような中間色を用い、ロマンチックで、クリシュナなどヒンドゥ神に人間を重ねたような恋の絵が多く描かれました。



《マルコス・ラガの内のチャンドラ・ブトラ(ラーガマ・シリーズより)》(部分) —アールキ派— 18世紀初期

左:《貴族の肖像》(部分)
—ムガルまたはゴルコンダ派—
17世紀前期
右:《蛇をくわえる山羊》(部分)
—ゴルコンダ派—
17世紀後期

